

第 33 回 START プログラム (インドネシア)

2016 年 8 月 13 日から 8 月 28 日までの約 2 週間、第 33 回 START プログラムに学部 1 年生 24 人が参加し、中矢礼美准教授 (国際協力研究科) ほか 2 人の職員とともに、インドネシア共和国東ジャワのマラン市にあるブラウィジャヤ大学に留学しました。

ブラウィジャヤ大学では、現在のインドネシアを知るためのさまざまな角度からのトピックについての授業が行われました。初日は授業が全て英語で進められることに不安や戸惑いを感じていた学生も、次第に、文法の間違いなどを恐れず発言するという姿勢が身についていきました。また、講義を通して、日本とは全く異なる文化や歴史、社会の問題に触れ、異文化への理解を深めました。さらに、授業で学んだインドネシア語を使い、日常生活や現地学生との交流においてもコミュニケーションを楽しんでいました。

講義終了後の自由時間には、学生 2 人につき 1 人のブラウィジャヤ大学の学生がパートナーとなり、一緒に教室や街に出て、身近な疑問を英語やインドネシア語、時には日本語や身振り手振りを使って懸命に解消していました。

また、現地の小学校訪問では、折り紙やけん玉などの日本の遊びを小学校の児童達に英語とインドネシア語で紹介したり、日本の歌と一緒に歌ったりと交流を行いました。

ホームステイを通しての KKN (社会貢献) も研修目的の一つとなっており、大学のあるマラン市から 2 時間程度離れた地方の村で、収穫などの農作業を経験しました。ホストファミリーにはほとんど英語が通じないため、英語のできる現地学生のパートナーも一緒に滞在しました。トイレや食文化などの生活様式の違いに、初めは不安を感じていた学生も、ホストファミリーの暖かさに触れ、一人一人がそれぞれの家庭で自分だけの経験を得ることができました。また、プロモ山へのオプションツアーでは、日本では見ることのできない壮大な景色に、インドネシアの自然の多様性や雄大さを感じることができました。

研修最終日には、渡航前から準備していたテーマについて、ブラウィジャヤ大学の学生や教員、ホストファミリーへのインタビューやアンケートなどに基づき、各自の研究課題 (医療事情の比較、食品加工、法制度、教育制度、交通問題、ごみ収集とリサイクル、など) についてのプレゼンテーションを英語で行いました。グローバル・コア・コンピテンシーの課題すべてに挑むことで最終発表の課題が達成されるという経験をし、学生たちは研修の意味を心と身体で理解できたようです。送別会では、感謝の気持ちを込めて昔話の劇を披露し、現地の学生や先生方と最後まで別れを惜しみました。

帰国後の事後研修では、改めて、研修を通してのグローバル・コア・コンピテンシーの成長を振り返りました。「英語で何も答えられないのが悔しかった」「環境は言い訳にできないことに気が付いた」「準備の大切さを実感した」など、英語や自分の意見を発言することに対する意識が向上していました。また、イスラム教人口の多い国の文化や慣習に触れ

た経験が宗教の多様性についても考えるきっかけになるとともに、本プログラムを経て、多くの学生が自然と今後の留学についても意識するようになっていました。



最終発表にて現地学生の質問に答える学生



小学校訪問では熱烈な歓迎をうける



授業ではインドネシア語の発音も勉強



修了証書を手に笑顔



送別会での英語劇「桃太郎」。楽しい演出にブラウイジャヤ大学の先生方の笑顔も誘った。